千葉県日独協会通信　No.45 －　2006年（平成18年）08月25日

Die Eiche

ディ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba
事務局　〒274-0822 船橋市飯山満町2-681 ワールドナーシングホーム内
Phone: 047-467-6111　Fax: 047-467-6123

対談「『バルトの楽園』よもやま話」開催

対談する出目監督と平尾会長

東映関係者と平尾会長夫人

平成18年6月28日(水)　6:00～9:00PM
於　OAGホール　129名

東映映画の大作シリーズ第2弾『バルトの楽園』の出目監督と平尾浩三当協会会長の対談「『バルトの楽園』よもやま話」が6月28日、当協会、財団法人日独協会、OAG(ドイツ東洋文化研究協会)三者共催によりOAGホールにて開催された。他団体との共催は、それぞれにとって初めての試みであり注目されたが大使館シュミット一等参事官も参加されて、当協会関係30名、財団法人日独協会66名、OAG関係者23名、招待者15名の計134名が参加、2人の同時通訳も入って盛会であった。当日は、板東俘虜収容所で演奏されていたといわれるチター曲を内藤敏子日本チター協会会長(当協会理事)が演奏、後OAGのマイケ・ロエダさんがドイツ語で対談について紹介、そして映画の予告編の上映、監督と会長による対談。主に、会長が出目監督の紹介、監督と黒沢明との関係や思い出話、『バルトの楽園』という題名の由来などが語られ、最後に聴衆からの質問に監督が答えられて予定を大幅に超過、対談会は8:00過ぎに終了。あとは、ホワイエで立食パーティー。参加者は、大山ハム、ユーハイムのドイツパン、ベッカーのピザとドイツパン、それにキリンビールで交流を深めた。

「バルトの楽園」よもやま話

一、出目昌伸監督紹介
一九三二年滋賀県生まれ。少年時代『酔いどれ』『羅生門』『生きる』に感激、早稲田大学文学部卒後、東宝入社、一九六一年から黒沢明の助監督として、『用心棒』『椿三十郎』『天国と地獄』『赤ひげ』の製作に関わられた。

二、黒沢明監督の思い出
黒沢明監督は『羅生門』で国際的な監督として認められたが、ドイツとの関係は助監督時代に、「ブルーノタウトの回想」という本を元に「達磨寺のドイツ人」というシナリオを書いて評価された。黒沢は「百年に一度の監督」といわれるが、常に文学的な描写よりも映画的な描写を重視。その良い例が『椿三十郎』の冒頭の部分、野良犬が人の腕をくわえて登場する場面である。「度肝を抜いて観客の心を掴め」が彼の口癖であった。

三、出目監督の代表作
『俺たちの荒野』昭和四十四年　監督協会新人賞
『きけわだつみの声』平成七年日本アカデデミー賞
監督・作品賞
『収容所からの遺書』（Tvドラマ）平成五年
NHK放送文化基金賞
『父の来た道』平成十七年　ギャラクシー賞
など枚挙にいとまがない。
（ここで約十五分間、メーキング・フィルムと予告編の上映）

◎質疑応答

(質)「本年三月末までは「日本におけるドイツ年」であったが、六月十七日に封切となった「バルトの楽園」はドイツ年と関係ないような感じであるが？」

(答)ドイツ大使館より、「ドイツ年は九月ごろ迄各種イベントを開催しているので、この映画もドイツ年公式映画として認める」とのお墨付きをもらった。ワールドカップも六月開催、第九初演も六月であった。

(質)映画の一部に、史実と異なる場面があるが・・。

(答)この映画は、歴史の再現物ではないので、数カ所にデフォルメとフィクションが入っている。

(質)時代考証はどのようにしたのか？

(答)九十年前の鳴門の研究家の本「鉄条網の中の四年半」の復刻版を参考にした。ドイツ兵が角のついた鉄兜を被っていないが、これは彼らが海軍所属であったからである。

以　上

～今後の主な催物案内～

＊ ドイツ文学読書会

平尾浩三会長による秋のドイツ文学読書会を下記要領で開催いたしますので奮ってご参加下さい。

① 講師：平尾浩三会長
② 日程：10月5日、19日、
　　11月2日、16日、30日
　　各日とも15:00～16:00
③ 場所：船橋中央公民館(橋駅徒歩5分)
④ 会費：3,340円(教材費、会場費など)
⑤ 問い合わせ：
　館野鷹二郎　047-485-9311
　水野春美　047-467-6306
　布施由未子　047-424-7645

＊ 協会創立10周年記念式典

① 日時：10月14日(土)14:30～18:00
② 場所：船橋グランドホテル
　　JR船橋駅北口徒歩3分
③ 式次第
　－挨拶　平尾浩三会長
　－祝辞　ドイツ大使館
　－記念講演　木村敬三日独協会副会長
　－日本舞踊　藤蔭　壽女、藤蔭　静寿
　　加藤　和子
　－立食パーティー
④ 会費：6,000円

＊ デュッセルドルフ交響楽団演奏会（チラシ）

昨年6月に来日、習志野文化ホールを満員にしたあの交響楽団が再来日します。

① 日時：11月4日(土)14:00開演
② 場所：千葉県文化会館ホール
③ 入場料：S　6,000円　A　5,000円
　　B　4,000円
④ 申し込み：会員特別割引10%
　但し、国枝副会長043-254-7370(TEL FAX)に希望席と場所を連絡下さい。
　又、10/14にも船橋グランド・ホテルで販売致します。

チター演奏会開催

平成18年7月22日(土)　2:30～5:00PM
於　中国料理ニュー白チョウ　28名

毎年恒例となっている、日本チター協会会長で当協会理事の内藤敏子先生によるチター演奏会は、7月22日に梅雨空の下、西千葉駅近くの中国料理店にて開催された。

内藤先生は門下生7名と当協会会員21名で満席となった会場で、スイス滞在時代にスイス・ジャーマンがドイツ本国で話されるそれと大きく異なり戸惑ったことやチターを教えておられる紀子様のご様子に関しての問い合わせに対してノーコメントを通すのに苦労されている話などを織り混ぜて、7曲を演奏。終了後、この演奏会には必ず参加される奥猛さんの音頭で乾杯、この店自慢の蒸し物4品と焼きそばを食べながら、懇親会は盛り上がった。また、内藤先生は親交のある谷村政次郎会員を紹介され、同氏は自著「軍艦」についての思い出話を披露。

なお、7曲の内訳は、下記のとおり。

① アルペンローズの花の咲く頃
② 我が夢の町ウィーン
③ 第三の男－今年はアントン・カラス生誕100年
④ 80日間世界一周－以前、豪華客船でのチター演奏を頼まれて乗船。乗客の中には一人旅の人が意外に多く、高校の地理の先生、1,,500万円のスイートに泊まっている大金持ち夫人など興味深かった。帰りは飛行機のエコノミーに座っていると、教え子のカーレーサーがやって来て自分のファーストクラス席と代わってくれた。
⑤ ファシネーション
⑥ トラウ湖の夕暮れ－チターの名曲
⑦ 乙女の祈り

チターの説明をする内藤先生

内藤先生と参加者の皆さん